

北海道の 風土を生かした 環境デザイン



㈱環境設計代表取締役
日本建築家協会登録建築家

下村 憲一

1 森林化社会の環境へ

100年前の英国では産業革命による「機械文明」が隆盛期を迎え、繁栄を極めていました。世界の富を集め成長拡大への都市開発を進め、自国の産業資本、社会資本を蓄積していきました。反面、急速な都市化による劣悪な住宅環境に対する反省から改善へ向けての試みが始まったのも、ちょうどその頃です。R・アーウィン、E・ハワードといった人々によって「田園都市」運動が進められ、W・モリスらの「芸術工芸」運動とも融合して、その理念は20世紀の近代都市デザインの理想主義へと引き継がれたはずでした。大英帝国にたそがれが訪れようとは誰も想像しえない時代のことで

す。その後100年、現代の社会は「機械文明」をさらに進め、日本においても高度な都市化社会、情報化社会が築かれました。優れた技術力と経済力をバックに、日本はいま勝者となっています。

しかし一方、都市生活者は、ストレスの高い生活環境の中に依然として暮しており、100年前につくられた「田園都市」ですら、日本においては渋沢栄一による田園調布に面影を残すのみで、いまだに夢で終わっています。

そういった意味では、日本は20世紀に繁栄した

機械文明の成功者であると同時に、その毒をあおった病人かもしれません。近代国家は自然を克服し、略奪し、管理することによって発展してきました。20世紀後半になりその成長の限界と矛盾が認識され、21世紀のいま新たな調和を求めて模索が進められています。

もとより「自然」は人間の生存に欠かすことのできない基盤であり、都市環境も自然の背景なしには存在しえないことは自明です。一方「都市」は長い時間の中で人間が獲得してきた英知の結晶であり、現代人間社会は都市なくしては成立しえません。この「自然」と「都市」が共に生き長らえる文明のかたちを、新しい時代は待ち望んでいるはずで

す。工業化も脱工業化という方向をもったと同じように、都市化も脱都市化に向かう時機が来ています。近年もう一歩進んだ概念が、「森林化社会」（エコポリス）として提案されています。都市の論理ではなく、自然の生態に深く根ざした持続可能な文明のかたちがおぼろげながら見えてきました。「機械文明」が生んだものが都市化社会でしたが、森林化社会の母体となる文明には、まだ名前はつけられていません。

しかし、そのイメージは、柔らかく、やさしい顔をもつものに違いありません。無機質のイメージをもつ「機械文明」にたいして、それは「生物文明」と呼ぶことができるかもしれません。そこでの核となる技術はバイオテクノロジーであり、その文化はバイオカルチャーという名で呼ばれるのでしょうか。それはこれまでの防衛的な自然保護主義とは異なり、ハイテクノロジーを背景とした積極的な「自然復興」のルネッサンスといえるかもしれません。

新しい価値を実現しようとする潮流が時代の大きなうねりになったときに、新しい世紀の始まりが実感されます。近年の地球規模での環境問題への取り組みは、新世紀のテーマが持続可能な社会と環境の再構築にあることを示唆しています。

2 北海道をデザインするひとつのイメージ

北海道は日本にあって極めて日本的ではない育ち方をした地域です。歴史的には日本の近代化とともにその開発が始まり、欧米の技術文化が積極的に導入され、早くから進取の気風がその根元に

ありました。また、風土もブラキストンラインという見えない自然の断層によって本州と切り離されています。温帯モンスーン型の日本の環境技術は北海道にはなじみません。北海道は日本的な伝統からは解放され、新しい今日的な価値の実現を目指すフロンティアでありたいものです。

「デザイン」は生活を豊かにしていくための知恵といえますが、同時にまた未来を先取りしていくための技術でもあります。「北海道をデザインする」。これは北海道が今も開発途上国であるがゆえの大きな課題といえます。デザインにはデザインポリシーが必要で、そのためには北海道のマスターイメージ、つまり目標とする個性を明らかにし、そのイメージにそって戦略的かつ組織的に街づくりやものづくりが進められるべきです。

北海道は幸いにも外からのイメージは大変良く、健康的で若々しくクリーンなイメージを強くもっています。それをうまく生かしてCI戦略を組み、街づくり、地域開発、住環境整備、商品開発、イベントなどを進めるべきでしょう。

3 北海道をデザインする二つのキーワード

社会が高度に都市化し、工業化し、情報化すればするほど、自然環境のもつ重要性が認識されています。快適な生活環境を支える基盤としてその価値が高騰しています。北海道に残されたこの広大な低密度利用の土地こそ、北海道を性格づけ、将来の可能性を開く鍵となるはずですが、しかし、自然に恵まれているわりには、自然を大胆に生かしてデザインされた都市はありません。

自然と都市のダイナミックな共生こそ、北海道にふさわしい都市イメージであり、これからの時代の国際的課題でもあるはずですが。近代的で先端的な「都市環境」と野生的で変化のある「自然環境」。この二つの共生の形を北海道はさまざまに創り出せるはずですが。私は北海道に21世紀型の田園都市をつくりたいと思っています。自然の豊かさにあふれ、美しい緑に囲まれた美しい暮らしがあり、街並が静かなたたずまいの中にある、住宅と職場と余暇の場が身近にあり北国らしい生活の香りがする、そんな普通で当たり前の住環境は、日本では北海道でしか実現できないでしょう。

北海道の都市はまだ歴史も浅く、都市の個性をこれから形づくろうとしている段階です。街づく

りに対する関心は近年ますます高く、人々は都市の機能性だけでなく環境デザインの質を求め始めています。質の高い社会資本の蓄積によって、地域イメージは高められ、それが住民意識の高揚や地域の活性化につながっていくことは多くの事例で明らかとなっています。

4 表現における三つのモノサシ

「民主性」「地域性」「同時代性」、この三つは私の建築表現のテーマであり、表現の質を吟味するモノサシです。私は表現主義者ではありませんが、建築における表現は設計プロセスの総合的認識を表すものであり、機能や形態に意味を与え、建物の社会的役割までも意志表示する点で建築の最も重要な要素といえます。

「民主性」とは、自由で開放的な社会が建築に求めるもので、権力を表現したり、重厚長大に陥りやすい過去の建築の性癖を戒めるものです。

「地域性」とは、北海道に関わる課題で、自然といかに共生していくか、またこの土地の生活をどう建築が支えるか、地域固有の形、材料、様式に関する課題は多くあります。他国や他地域のマネを安易にすることだけはやめましょう。

「同時代性」は、今日の社会と応答可能な表現とは何かという問題で、歴史的にはモダニズムが依然として同時代的潮流であると考えています。

北海道の風土を生かした環境デザインを考えるとき、モノサシの基準となる座標を定め、二つのキーワードのバランスをとりながら、一つのイメージを鮮明に描くことが、これからの課題です。

profile

下村 憲一 しもむらけんいち

1946年北海道苫小牧生まれ。'70早稲田大学理工学部建築学科卒。'70～'76年竹山実建築総合研究所勤務、'76～'78年ロンドン建築協会AAスクール留学、'78年(株)環境設計設立、代表取締役、現在に至る。北海道大学非常勤講師、(社)日本建築家協会北海道支部長、北海道赤レンガ建築賞、公共建築賞審査委員など歴任。

主な作品は、占冠村サイクリングターミナル（北海道建築奨励賞）、本別町ステラプラザ（公共建築賞優秀賞/北海道赤レンガ建築賞）、長沼町総合保健福祉センター（公開コンペ最優秀賞）、石狩市民図書館（公共建築賞優秀賞/日本図書館協会建築賞/北海道福祉のまちづくり優秀賞/バリアフリー大賞）など。
